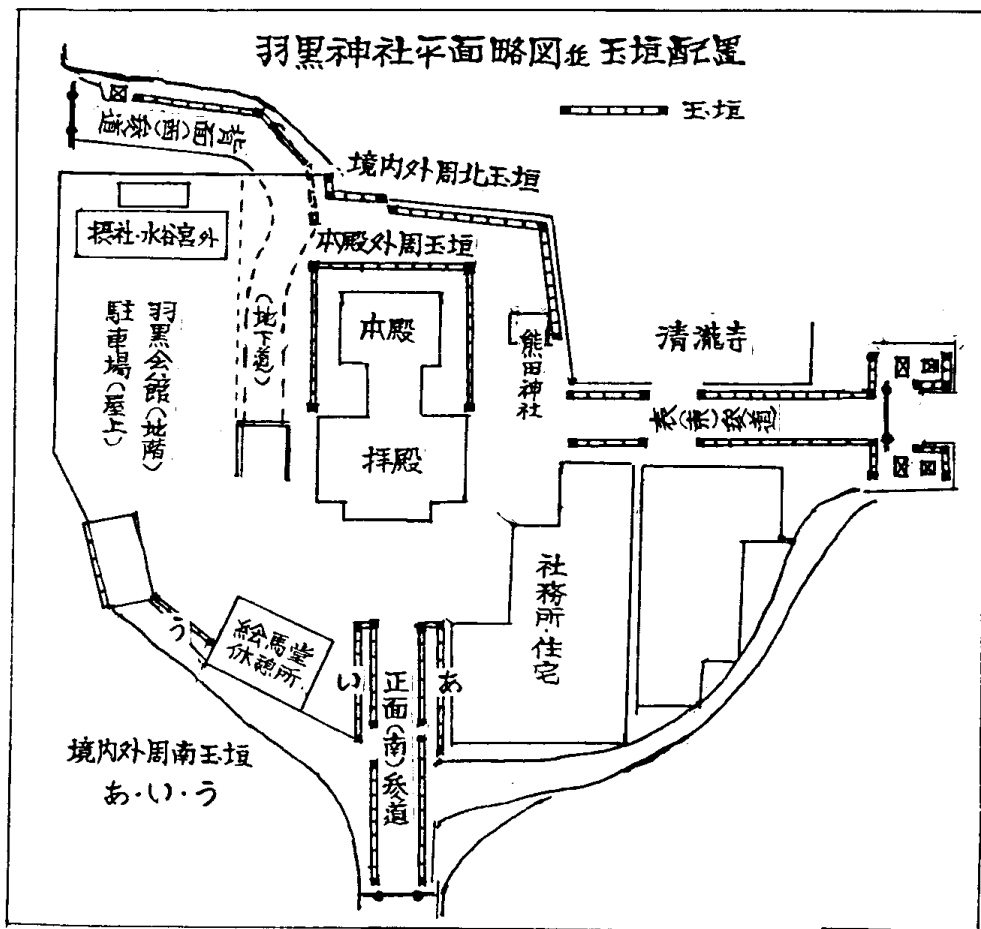


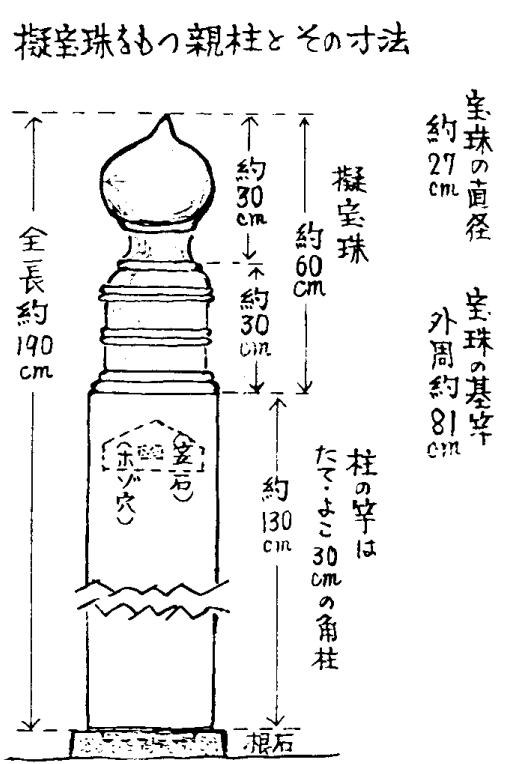
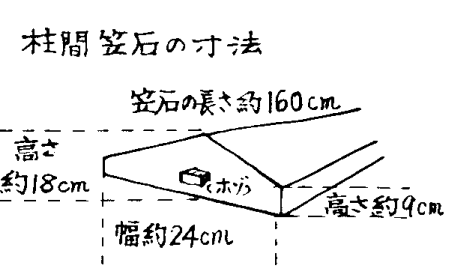
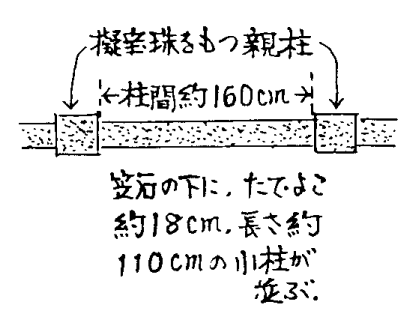
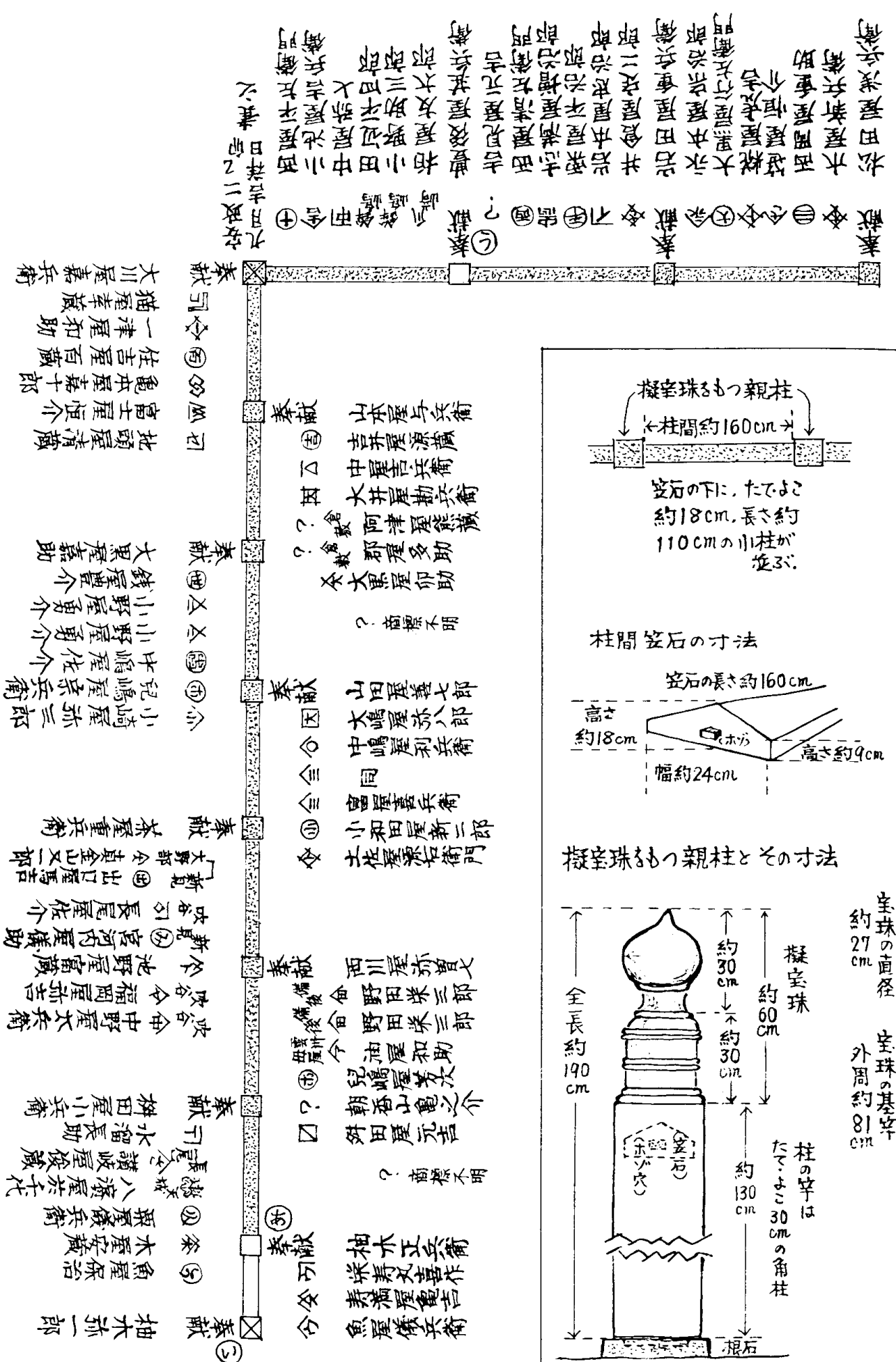
十玉嶋いしづみ探訪記  
**羽黒神社玉垣考**  
 別巻



もくじ

本殿外周玉垣	ページ 2~5
配置と刻銘 解説・資料・写真	
正面参道玉垣	6~7
配置と刻銘 解説・資料	
境内外周(西参道の北)玉垣	8~10
配置と刻銘 資料及写真と解説	
表参道玉垣	11~15
配置と刻銘・資料 写真と解説	
境内外周(北側)玉垣	16~18
配置と刻銘 写真と解説	
玉垣配列の複雑さ	19
境内外周と背面参道	
背面参道玉垣	20~22
配列と刻銘 写真と解説	
総括	23~24
解説と写真	





字体が整い彫りが浅く力強さに欠け、石も何となく新しく製作時期や職人の手が違うように思われる。「下の写真と次ページ写真・対比参照」

昇殿門両脇の玉垣では柱間の小柱の数に違いが見られる。もともと昇殿門の位置にあった縁本かの小柱の移動先は見当がつかない。

次に親柱も注意深く見ると「奉献」の文字の字体の違いや「奉献」が無くて「阿州」と大書したのも見られる。下の写真のように

「奉獻」と文字が縦に並ぶ「3ページ①・2ページ②(か)」と獻と横に並ぶ「2ページ③」などと違いも見られ、違いの理由や意図はわからない。

ともかくにも、ノミとツチだけで擬宝珠の複雑な形を彫り出した江戸時代の職人の技や腕に感嘆するのみ。

百五十年経た今、玉垣に残る謎は幾つもあるが、「連島左官駒二郎」の名前が逆様に彫りこまれた不思議(2ページの図の中ほど)……一介の職人分際で親方の名前と肩を並べるのはもとより、玉垣に名を連ねることは憚られるという意志からであったのか……「連島④戸城屋駒次

郎」とはどのような人物で、羽黒神社再建にどのようななかかわりがあったのかなど、にわかにはわからないまま、に謎を秘めて興味を呼ぶ。

本殿外周玉垣の西側、拝殿に接する南端部分、親柱二本に刻まれた文字が楷書的で安政二年建立のもの(次ページ写真)とは趣きが異なる。小柱三本は東側の昇殿門の所にあったものの一部が移されたと推定している。





本殿外周玉垣の東北角柱と東側玉垣の一部。意匠をこらした擬宝珠をもつ親柱の林立は荘観であると共に、神仏習合の色彩を強く感じさせる。

本殿外周玉垣の寄進者居住別数

親柱ニ二本 小柱一一四本 総数一三六本  
寄進者実数一三四人

「一人で四、二本の寄進 九人」  
「二人で一本を寄進 四人」

1. 阿州「四国阿波国藍商人か」三人「六本（親柱ニ、小柱四）」
2. 丸龜三人（小柱三本）
3. 大阪二人（小柱六本）
4. 能登輪島「北前船か」一人（小柱一本）
5. 雪州母屋「出雲国母屋」一人（小柱一本）
6. 福山一人（小柱一本）
7. 備後一人（小柱二本）
8. 岡山二人（小柱二本）
9. 惣社「総社」一人（小柱一本）
10. 倉敷二人（小柱二本）
11. 天城一人（小柱一本）
12. 新見二人・大野部「哲西野大野部」一人（小柱二本）
13. 吹谷「吹屋」三人（小柱三本）
14. 津島二人（小柱一本）
15. 鉾島四人「四本（親柱一）」
16. 長尾一人（小柱一本）
17. 爪崎三人（小柱三本）
18. 玉島湊九口人「九六本（親柱一、小柱七七）」

憶測をたくましくする

西出孫左衛門……戦国武将朝倉氏の豪老の子孫といひ、江

\*

戸時代北陸加賀で北前船船主として栄え、代々孫左衛門を名乗った豪商。二代目の時、持船が安永七年（一七七八）には備中玉島湊に入港、以降船商売が続いたという。現在の西出商店とのつながりが考えられるだろうか。その他、玉垣に見られる木屋・銭屋・魚屋・茶屋・耕田などいづれも北陸の船主・豪商の屋号。江戸後期玉島湊に支店を置いたのか……

出口外八部  
 上成 若松屋与兵衛・宇野林蔵  
 上成 米屋蔵太郎  
 上成 小野兵次郎  
 敬字左衛門  
 下花柳亭三川木熊後右衛門  
 下 正本屋律次郎  
 上 金屋秀蔵・岩本卯助  
 下 直屋周蔵  
 上 宇野蔵太郎  
 下 大和屋源太郎  
 下 升屋富次郎・杉屋金吉  
 小野助三郎  
 萩原国四郎  
 沖田屋藤三郎・東屋辰次郎  
 田辺良右衛門  
 萩原真三郎  
 万屋直右衛門  
 小野虎蔵  
 兼述梅太郎  
 萩原富太郎  
 西原屋吉助  
 田辺良兵衛  
 龜山屋高太郎  
 小野平十郎  
 小野舎之助  
 小野幸太郎  
 武政元右衛門  
 田辺平田郎  
 樋口屋藤左衛門  
 小野伴治郎  
 小野茂蔵  
 今崎屋理平  
 依屋藤蔵  
 玉屋友次郎  
 福本屋伴助  
 大橋屋弥助  
 大善屋次郎七  
 津田屋真左衛門  
 津田屋条太郎  
 大幸屋茂蔵  
 福本屋久次郎  
 石橋屋吉吉  
 萩屋伊勢太郎  
 本寄進 郡屋多介

東側

(8)

鉾

鉾

鉾

鉾

(3)

西側

(7)

(2)

大月嘉右衛門  
 和泉屋善次郎  
 和泉屋善次郎  
 小坂屋蔵  
 吉見屋儀三郎  
 竹田屋吉吉  
 鴨屋庄助  
 辻屋政助  
 郡屋乃平  
 吉茶屋吉吉  
 松屋与兵衛  
 竹島屋龜三郎  
 竹屋七蔵  
 浜屋為蔵  
 島屋松蔵  
 山本屋吉右衛門  
 西岡屋重助  
 玉野屋初次郎  
 玉野屋初次郎  
 玉野屋初次郎  
 玉野屋初次郎  
 玉野屋初次郎  
 山本唯蔵  
 高屋住助  
 油屋幸蔵  
 高屋徳三郎  
 久代屋倉吉  
 石崎屋芳太郎  
 清水屋久七  
 中屋久平  
 花屋兼兵衛  
 住吉屋百蔵  
 本寄進

本寄進

正面参道 玉垣配置と刻銘

同じ構造ではあるが、正面参道玉垣の親柱・小柱はともにも本殿外周玉垣の親柱・小柱よりひとまわり小振りな作られ、擬宝珠の基竿の鉄輪も一組少ない(23・27の図対比較参照)など、本殿に対してひ

かえめな配慮がうかがえる。

また、寄進者の大半は玉島藩とその近隣……鉾島・爪崎・上成・堤下・吉浦・乙島……が占め、他地域では僅かに倉敷三・岡山一・田淵(不明)一と数えるほどというの特異。理由についてはわからない。

明治十二年寅六月其元  
 施主 備前国味野郡原津部  
 世談人 東洋仲使中

しるはら  
注連柱の刻銘  
(本建機と残りの柱)

③ 新許良神翌

明治九年 願主 大西久左衛門  
小野善衛門

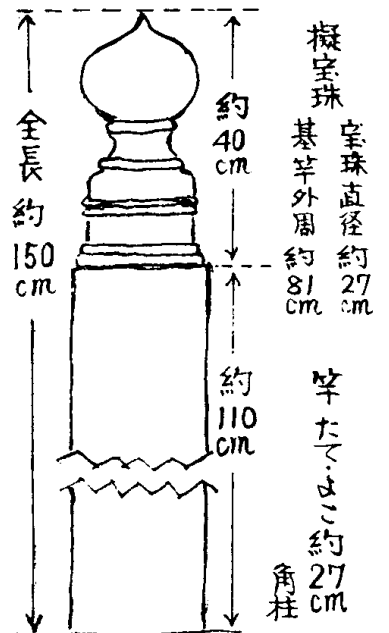
④ 我流さくし

五月吉辰 願主 井上崇三郎  
仁科弥曾七

小柱の寸法

たてよ約15cmの  
角柱で長さ約66cm

親柱の形と寸法



親柱

小柱

元治元年甲子年九月建之

大野善太郎  
村上嘉兵衛  
村上嘉兵衛  
村上嘉兵衛  
村上嘉兵衛  
村上嘉兵衛  
村上嘉兵衛  
村上嘉兵衛

佐藤赤右衛門 佐藤順治郎

横溝山右衛門  
横溝小右衛門  
横溝小右衛門  
横溝小右衛門  
横溝小右衛門  
横溝小右衛門  
横溝小右衛門  
横溝小右衛門

「」  
推定  
判読

西園屋安五郎

橋本治兵衛  
同  
同  
同  
同  
同

比原佐五兵衛 比原新三郎

浅原岩吉 浅原辰成

浅原辰成

中原好太郎

中原好太郎

中原慎之助

中原慎之助

小幡辰次郎

奉寄進 伊庭太郎兵衛

渡辺半三郎

生衛屋兼平

魚屋儀兵衛

大島屋林吉

大村屋新藏

森永鹿藏

森永徳之丞

森永仙藏

小野仁佐衛門

上成 小野武太郎

平松吉三郎

森永善左衛門

参道上段

中段下段

新井地主人 守屋長兵衛  
中屋吉兵衛  
小崎屋赤三郎

柏木弥一郎  
守安恭敬  
守安恭敬  
守安恭敬  
守安恭敬  
守安恭敬  
守安恭敬  
守安恭敬

山田屋吉藏

中島屋利兵衛  
広島屋徳三郎  
新屋実右衛門  
西本屋利兵衛  
吉浦 中原万之丞  
新屋和右衛門  
塚本屋柳次郎  
仁科弥曾七

魚屋走助

陶原徳之助  
船本屋秀吉  
沼島屋平吉  
堤菊屋美藏  
浜田屋彌藏  
八田屋勝兵衛

平野屋茂八

魚屋繁藏

福種屋常介

橋本屋庄助

船屋屋友太郎

木曾屋長治郎

宮崎屋喜三郎

八田屋嘉兵衛

奉寄進 三宅兵衛

注連柱

柱は五柱あり、  
明治以後に建機  
出入口確保のため  
撤去され移動した。

栗屋元藏

島本屋リ工

大和屋卯三郎

我屋栄三郎

西側 [21.図.乙]

西重助 (1)

西重助 (2)

西重助 (3)

西重助 (4)

西重助 (5)

西重助 (6)

西重助 (7)

西重助 (8)

西重助 (9)

西重助 (10)

西重助 (11)

西重助 (12)

西重助 (13)

西重助 (14)

西重助 (15)

西重助 (16)

西重助 (17)

西重助 (18)

西重助 (19)

西重助 (20)

西重助 (21)

西重助 (22)

西重助 (23)

西重助 (24)

西重助 (25)

西重助 (26)

西重助 (27)

西重助 (28)

西重助 (29)

西重助 (30)

西重助 (31)

西重助 (32)

西重助 (33)

西重助 (34)

西重助 (35)

西重助 (36)

西重助 (37)

西重助 (38)

西重助 (39)

西重助 (40)

西重助 (41)

西重助 (42)

西重助 (43)

西重助 (44)

西重助 (45)

西重助 (46)

西重助 (47)

西重助 (48)

西重助 (49)

西重助 (50)

西重助 (51)

西重助 (52)

西重助 (53)

西重助 (54)

西重助 (55)

西重助 (56)

西重助 (57)

西重助 (58)

西重助 (59)

西重助 (60)

西重助 (61)

西重助 (62)

西重助 (63)

西重助 (64)

西重助 (65)

西重助 (66)

西重助 (67)

西重助 (68)

西重助 (69)

西重助 (70)

西重助 (71)

西重助 (72)

西重助 (73)

西重助 (74)

西重助 (75)

西重助 (76)

西重助 (77)

西重助 (78)

西重助 (79)

西重助 (80)

西重助 (81)

西重助 (82)

西重助 (83)

西重助 (84)

西重助 (85)

西重助 (86)

西重助 (87)

西重助 (88)

西重助 (89)

西重助 (90)

西重助 (91)

西重助 (92)

西重助 (93)

西重助 (94)

西重助 (95)

西重助 (96)

西重助 (97)

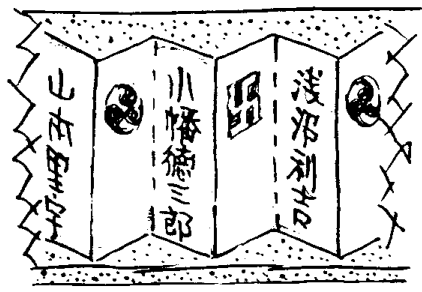
西重助 (98)

西重助 (99)

西重助 (100)

境内外周南側 玉垣配置と刻銘

トモエとマンジの型紋が交互に彫りこまれ、特に小柱は平たい一枚石の表面(正面参道に面する側)は屏風状に石を削り(下図)社殿に向く面に寄進者氏名を、その反面にトモエ又はマンジの型紋を交互に配置する凝った構成になっていて、特色が感じられる。



屏風状になった小柱 (背面は平面で無地)

左の玉垣列はかつては境内外周の西側を巡る玉垣の一部と思われる。羽黒金鑓建設により大部分の玉垣は取り除かれ、僅かに一部が残ったものと思われる。

休憩所(参馬堂)の西側玉垣(21.図.丙)

三宅最平

香川福太郎

有和松三郎

古城大平

渡辺森三郎

金沢松三郎

千田要太郎

藤井子之生男

西信平

田辺吉太郎

佐藤光太郎

渡辺憲三郎

佐藤勝四郎

仁科亦曾又

東側 [21.図.丙]

三宅品治郎

石橋新

丸野喜十郎

林手船作

龜山増造

森永亀之助

河手虎吉

池田仁太郎

中西六重喜 小幡篤三郎

三宅富次郎

住吉丸長次郎

中桐勝太郎

原田小太郎

進藤喜八郎

進藤大三郎

三好川亀太郎

高見龜

山本里守

小幡徳三郎

安原方次郎

浅沼利吉

横溝増太郎

清水考次郎

上野利吉

尾上守平

伊藤竹五郎

武繩吉太郎

秋山嘉吉

龜山清三郎

渡辺吉治郎

太田嘉吉

難波辰吉

今井兼平

吉城太平

瀧口源治郎

秋田金治郎

斎藤恒治郎

岡本多四郎

山口鉄太郎

龜山和子

佐藤栄三郎

中藤南藏

中野栄次郎

吉野幸治郎

菅大塚和三郎

秋岡平三郎

奉寄進

渡辺芳藏





正面参道の最上段東側玉垣の一部とその奥の石垣上に沿った境内外周の玉垣（兼物は社務所兼住居の一部）

正面参道の玉垣もまた擬宝珠をもつ角柱が並び、約150cmの柱間にはそれぞれ小柱7本が立つ。元治元年(1864)再葺の銘文がみられ、社殿の全面再葺の大事業の締めくくりに、本殿外周の玉垣整備にあわせて、本殿玉垣よりひとまわり小振りな構造をもって整備し主要参道に花を添え、羽黒神社の神域一新を図ったのであろうと推測される。再建前の玉垣がどのようなものであったかは不明。

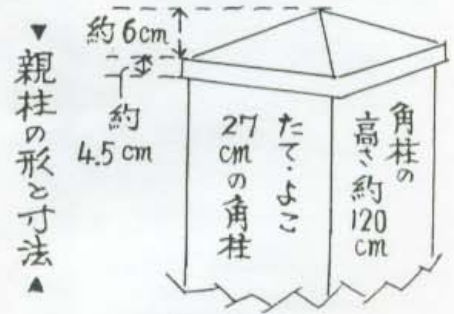
正面参道の登り口東側の玉垣の一部





正面参道の最上段西側玉垣の一部  
と石垣上に沿った境内外周の玉垣

境内玉垣は正面参道玉垣とは全く趣異なる  
平たい角堆の笠をかぶった親柱(右の図)。小柱もまた  
柱ではなく、参道に面して表側は屏風状になっており、  
裏側は下の写真に見られるような一枚石であることが  
大きな特色である。明治15年(1882)建立のこの  
玉垣は明治初めの神仏分離令の影響を受け精一杯  
に工夫と知恵を働らかせた造形であろうと思う。



境内外周玉垣の裏側を拝殿腰付近から  
見た状態……長方形の平たい一枚石が  
親柱の間に見える。



表(東)参道 玉垣配置と刻銘

玉垣柱の総数と構成

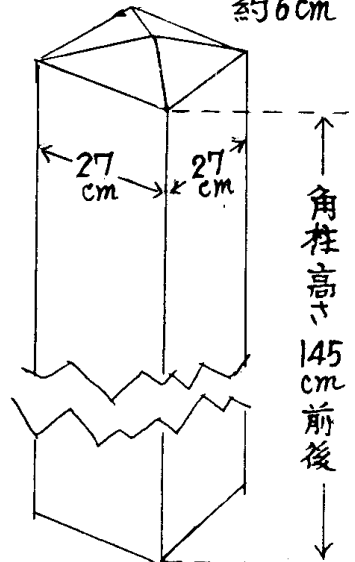
親柱 六七本(北側三四・南側三三)  
 小柱 二八三本(北側一四三・南側一四〇)  
 柱間の小柱数 上段七本(すく) 中段五本(すく) 前段三本(すく)

◆ 小柱の寸法

たてよこ約15cmの角柱で高さ63cm前後

◆ 親柱の形と寸法

剣先部分の高さ約6cm



〔北側〕

世話寺古城平・古城園(部)

林莊兵衛  
 井出杏牙  
 辻英一  
 守安龜太郎  
 井出杏牙  
 辻英一  
 守安龜太郎  
 井出杏牙  
 約集所川口淵藏  
 武繩吉太郎  
 秋山嘉吉  
 安田徳太郎  
 岩田七三郎  
 吉川芳一郎  
 黒川清左衛門  
 小野儀藏  
 小野亭吉郎・小野敷太郎  
 竹井与兵衛  
 赤沢直吉  
 大月長次郎  
 武政友太郎  
 花隈雨石  
 境田小一郎  
 井上竹次郎  
 渡辺金三郎  
 三宅岩吉  
 妹尾嘉平治  
 原田小太郎  
 猪木久次郎  
 宇野作平  
 浅野治郎吉  
 龜山儀平  
 奉寄進：河手茂吉

上段

〔南側〕

世話寺古城平・古城園(部)  
 西重吉  
 広井栄次郎  
 広井栄次郎  
 広井栄次郎  
 広井栄次郎  
 広井栄次郎  
 井上生一郎  
 広井栄次郎  
 広井栄次郎  
 広井栄次郎  
 広井栄次郎  
 廣井栄次郎

〔南側〕

奉寄進：川上権  
 大月加津  
 小野直  
 光岡勝  
 光岡勝  
 坂井常太郎  
 公木慶吉  
 徳永清七郎  
 大月武作  
 蒲生三郎  
 荒木馬太郎  
 高田高太郎  
 藤沢正三郎  
 龜山常吉  
 白神伴次郎  
 香西彦平  
 肥福神丸  
 武林長平  
 築山次郎  
 近藤太郎  
 吉岡寅吉  
 太田太郎  
 岡本多四郎  
 松田武郎  
 介小林多治吉  
 吉山本治八  
 吉山本治八  
 吉山本治八  
 吉山本治八  
 吉山本治八  
 吉山本治八  
 大西久左衛門  
 明治三十五年辰一月某之

表參道 玉垣

南側の玉垣小柱には風化損傷のため  
判読が判読できないものが月々つ。  
⊗ 判読不能

(北側)

- 中原新十
- 龜山源兵衛
- 龜山源兵衛
- 龜山源兵衛
- 龜山源兵衛
- 龜山源兵衛
- 浅野茂一部
- 渡辺芳藏
- 渡辺芳藏
- 渡辺芳藏
- 渡辺芳藏
- 渡辺芳藏
- 中原要一部
- 龜山義夫
- 龜山義夫
- 難波市太郎
- 守安豊太郎
- 守安豊太郎
- 大月喜美比古
- 大島徳藏
- 大島徳藏
- 大島徳藏
- 佐藤漸助
- 味野塩船
- 田沢松の
- 小山喜代八
- 野瀬七平
- 水口重吉
- 青木役三郎
- 上野紋七
- 広常安太郎
- 大月半十郎
- 水口平吉
- 花山吉造
- 真保保治
- 長徳丸福藏
- 観音丸庄三郎
- 平田要藏
- 中藤兼次郎
- 香西坂治郎
- 久保田せい、戸神しけ
- 守分友平
- 海原善三郎
- 堀口平十郎
- 中野崎太郎
- 浅原辰年男
- 岡本蔵三郎
- 岡本勘三郎
- 中野吟一郎
- 中原利平
- 猪木与七

中柱

(南側)

- 近江惣兵衛門
- 守安方平
- 中張民三郎
- 田辺光右郎
- 平井市三郎
- 小野豊吉
- 高橋徳藏
- 清水早太郎
- 西平品十郎
- 吉川嘉三郎
- 菰口兼一
- 菰口兼一
- 角井彦次郎
- 中藤菊藏
- 西永助
- 平田徳太郎
- 平田儀平
- 大井利平
- 平田要五郎
- 渡辺林三郎
- 赤沢三郎
- 中塚一郎
- 中塚銀大
- 中塚長十郎
- 西山与十郎
- 小野柳藏
- 大熊松
- 遠見兼八
- 妹尾佐太郎
- 高田三郎
- 高田篤三郎
- 中原次郎
- 國富理忠
- 虫明豊一郎
- 鬼柘野守彦吉
- 大難波彦作
- 山本健藏
- 牧佳三郎
- 安原吉平
- 安原吉平
- 安原吉平
- 安原吉平
- 安原吉平
- 藤田儀平
- 己之五男
- 己之五男
- 木光支店
- 木光支店
- 木光支店
- 木光支店
- 藤田助七

柱建注道表  
銘銘

北の柱(表)思敬(裏) 昭和十三年三月吉日  
南の柱(表)致誠(裏)

願主 玉島町  
山本直次郎  
山本二郎  
山本三郎

明治二十五年玉垣建老の背景には、その前年… 明治二十四年七月山陽鉄道が笠岡まで開通したが、この時港がさびれると騒いで、玉島駅を長尾村の田んぼにへ追いやった玉島港の人たち… 港の発展・繁栄を願っての取組みであったと推測する。

玉垣寄進者にも新しい時代の流れを感じさせる。

明治十四年乙島村野浦田沖に操業を開始した玉島紡績所は湊町に活性化をまねいた新しい産業（14ページへ続く）

表参道の整備は一日にして成らず

- ①寛政三年(一七九一) 阿波の獅子(下の写真中央) 吽形(の狛犬)の  
 15ページ写真(中央の木の茂みの下) 大阪の阿波藍商人仲間が大阪で作  
 らせて船で運んできた。 ②寛政五年(一七九三)石灯笼一基  
 高橋忠四郎導高寄進(下の写真右寄り羽黒神社看板につくられて空がわすか  
 に見える) ③寛政八年(一七九六)石灯笼一基 松山高瀬講中寄  
 進(15ページ写真左寄り) ④明治二十五年(一八九三)玉垣建立  
 併せて石段も造られたと考えられる。 ⑤昭和十一年(一  
 九三六)石鳥居 乙島・福武敏重寄進



⑥昭和十三年(一九三八)注連柱一対 玉島町山  
 本直次郎・二郎・三郎寄進(上の写真 参道  
 最上段の左右の石柱)

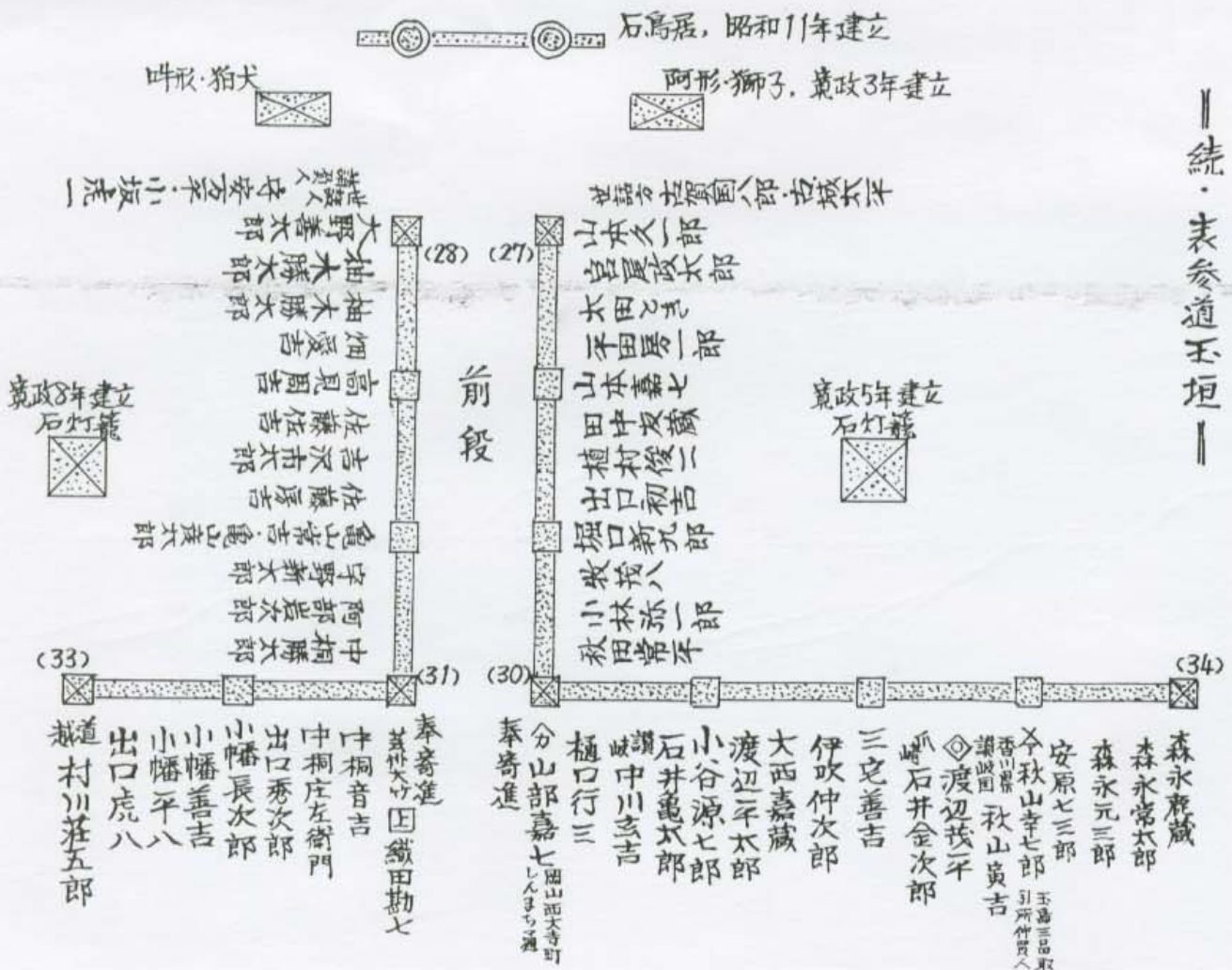




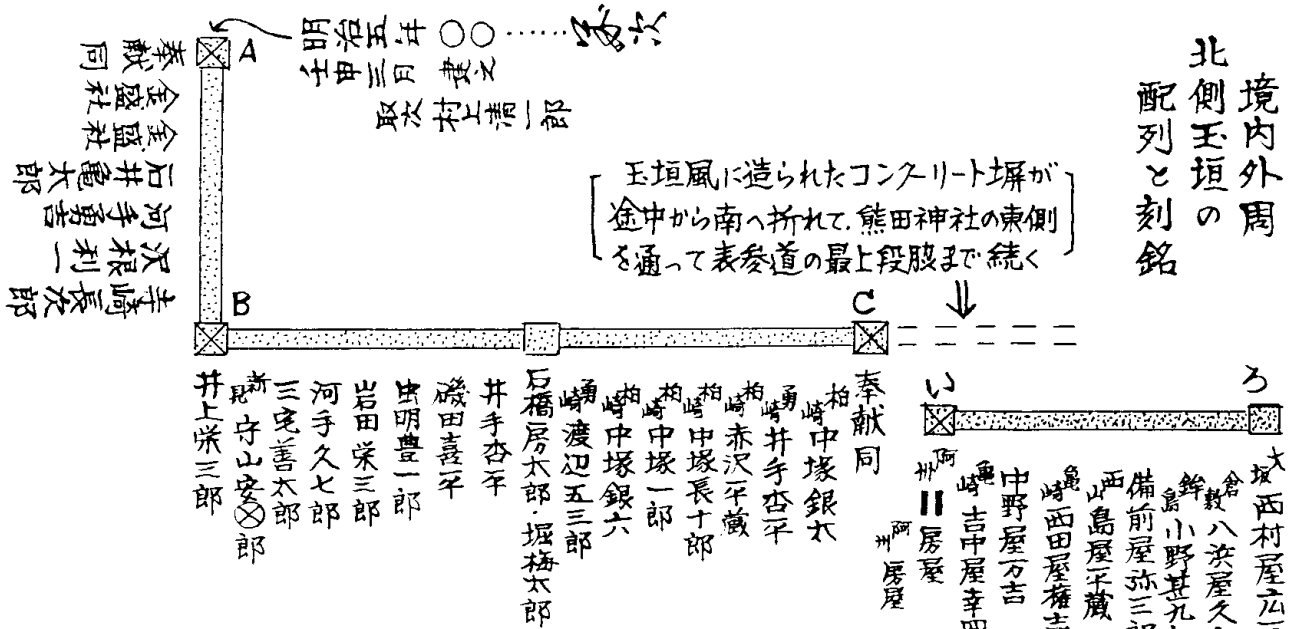
写真説明

(1) 13ページ上の写真は表参道上段の玉垣・注連柱を見通して羽黒宮拝殿の東側面を望む

(2) 上の写真は表参道入口南側の玉垣で、13ページ下の写真・表参道入口北側の玉垣と対になる。



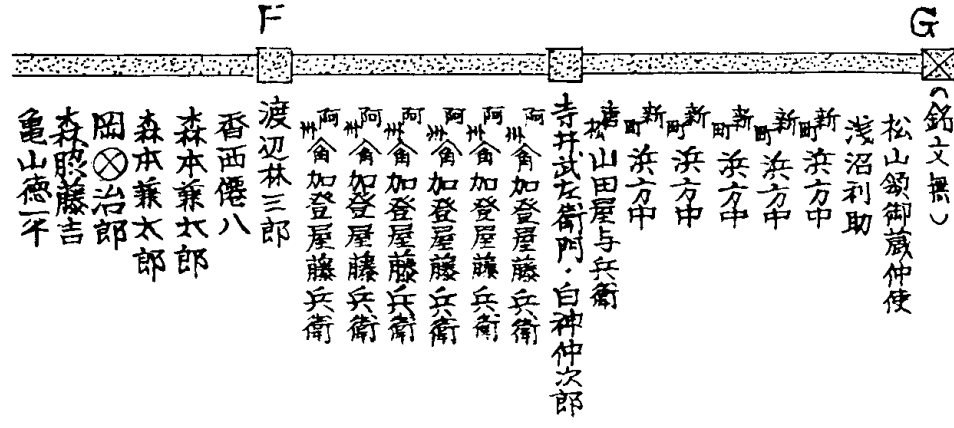
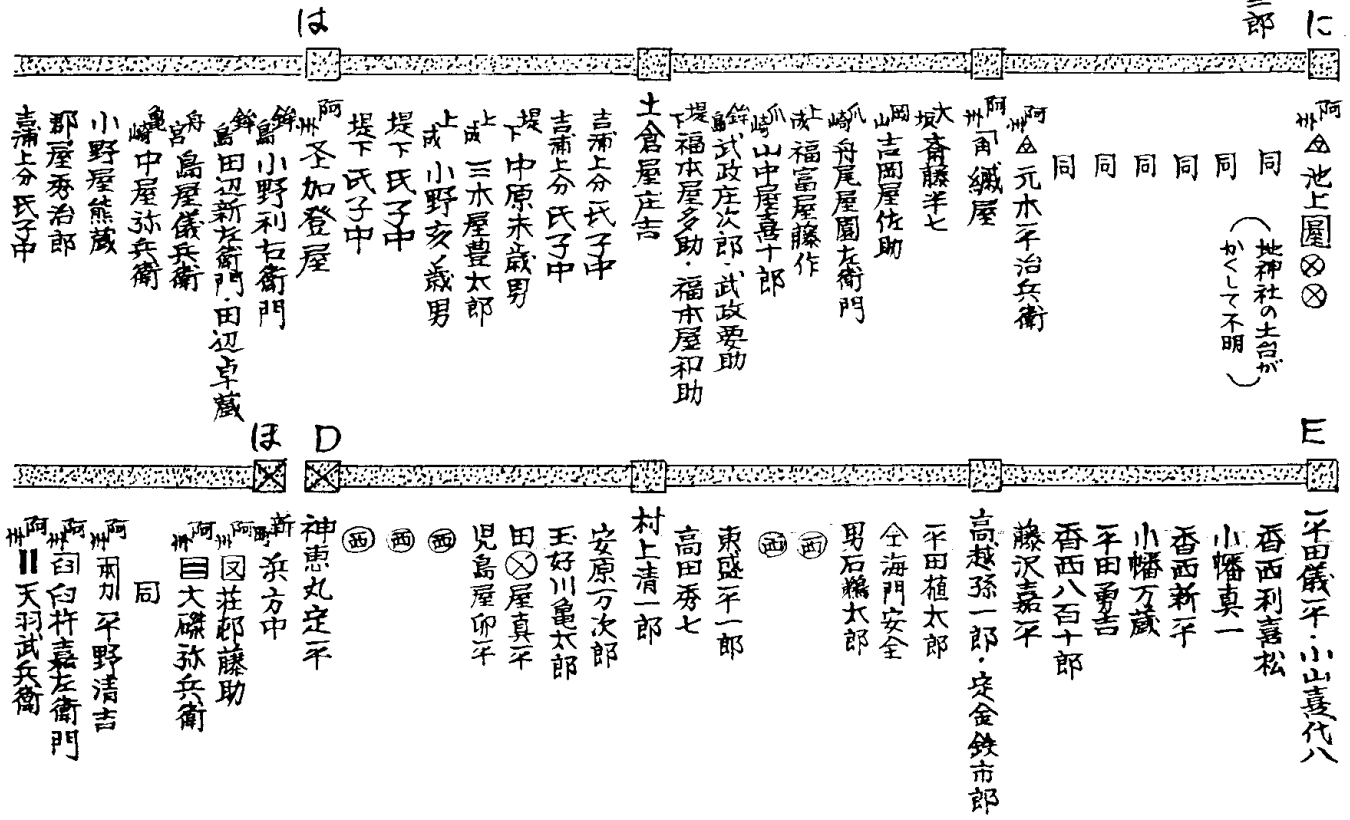
北側玉垣の  
配列と刻銘



玉垣風に造られたコンクリート塙が  
途中から南へ折れて、熊田神社の東側  
を通過して表参道の最上段股まで続く

※ い〜ほ…擬宝珠型親柱の玉垣  
※ A〜C・D〜G…剣先型親柱の玉垣

⊗ 判読困難  
□ 推定判読



玉垣 A〜G  
親柱 11本  
小柱 61本  
玉垣 い〜ほ  
親柱 7本  
小柱 41本





井上栄三郎  
 玉垣笠石のホゾ穴跡 (3ページ 図も参照)

上の写真は境内北・神庫前の 剣先型親柱の玉垣列……写真中央の電柱そばの 井上栄三郎の名が見える親柱に 笠石の影が見える(右上図参照)が、かつては玉垣は左折せず、井上栄三郎名の親柱から一直線に延びていたと考えられる。

同じことが上の写真右端・房屋の文字が見える親柱にも 笠石のホゾ穴跡が見える。これは下の写真の擬宝珠親柱の玉垣列の左端に当る親柱である。この玉垣列のすぐ後ろにはコンクリート製の外壁が巡らされていることから考えて、後からここへ移動して据え置いたものと思う。

本殿の裏手に当る境内北の擬宝珠親柱の玉垣列……かつては背面参道にあつたものではないかと思う。





絵馬堂兼休憩所の西股にわすかに残る剣先型親柱の玉垣列

上の写真の玉垣列の右方向に、かつては玉垣が連なり延びていたと思われる。その玉垣が下の写真の玉垣列ではなかったかと想像している。  
 剣先型親柱に彫られた文字の大きさや形、彫りが深く豪快な感じが似通っていることから推測してみた。境内西側……現在駐車場と化した付近に並んでいたのではないかと考える。 建立の年代は不明であるが明治4年か同5年ごろではないかと推測している。



熊田神社の裏手にかくれるように並ぶ剣先型親柱の玉垣列

▲玉垣配列の複雑さ▼

①境内外周(北側)玉垣

① 16ページ図「A S C」剣先型親柱の玉垣列は、もとからこの付近にあったものと想像するが……

② 16ページ図「いさほ」擬室珠親柱の玉垣列は、かつては背面参道の南側に配置されていたものが、都合によって移動したと考える。

③ 16ページ図「D S G」剣先型親柱の玉垣列は境内外周用として、もとは現在の水谷宮など摂社がまつられている拝殿前付近にあったものと推測する。

④背面参道玉垣

① 20ページ図「B S C」擬室珠親柱の玉垣列は、もとから配列されていたと思われる、さらに「C」から下手へ後つかの玉垣がかつては存在したが、どこかへ移動したと考えられる。

② 20ページ図「いさほ」剣先型親柱の玉垣列は分断されてばらばらになったような感じだが、もとは境内外周用として境内の西側——現在の駐車場付近にあって、8ページ左下図「あさひ」の玉垣列と連なっていたと考えられる。

(資料) 「羽黒山を攀る」

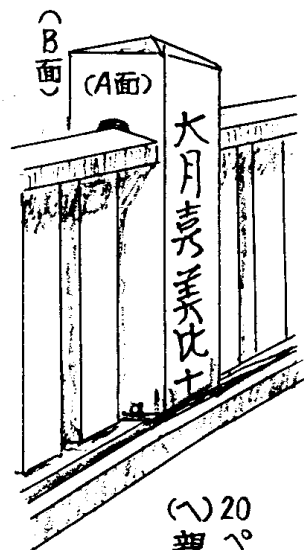
……(前畧)……ともあれ、羽黒様は子供の冒険心を満足すすに充分な遊び場所でもあった。赤沢電機店横前の石垣を攀登って棚へ上がるのである。棚は二段あり、最後は玉垣を乗り越えて境内に登頂を極めると、クライミンクは終了するのである。

……(中畧)……

今も羽黒様へお参りして、境内の西、玉垣へ寄つて待めば、吹上げる潮風は老松の梢を揺って颯々と、冒険に明暮れした、ゆきし日の回想を甦らせてくれるのである。

玉島金吾物語子供風土記 亀山茂樹編著 昭四三発行より

註記



20ページ図上部 (ハ)親柱の図化

21ページ下の写真も参照

(笠石)

永年八月吉祥日…… A面には建立年代が刻ま

れているが、笠石でかくさ

れて不明——残った文字と剣先型親柱の玉垣建立が明治時代に集中することから明治四辛未年と判断した。またB面(親柱背面)には笠石の

ホゾ穴跡が埋めてつぶされている。元来は角柱であったことをうかがわせる。

背面(西)参道の  
玉垣配列と刻銘

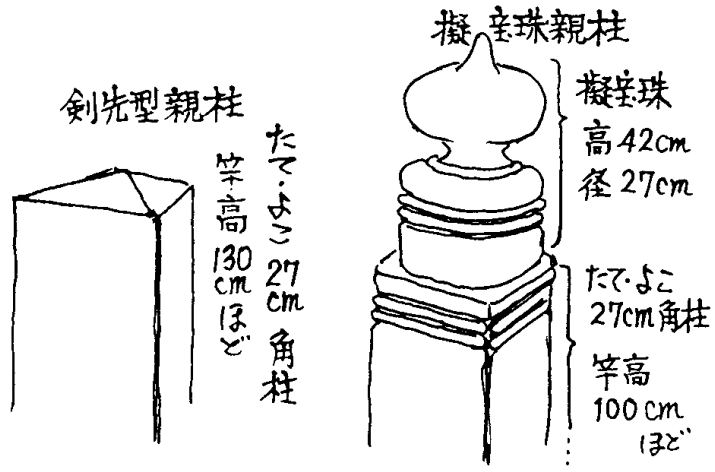
阿 倉加登履藤(兵衛)  
見島屋芳次  
松 河内屋仲助  
川 丸屋久兵衛  
松 高野屋権吉  
備前屋八十八  
龜屋儀兵衛  
大島屋仙蔵  
奉献同  
阿 彦崎屋長治郎  
西 山本屋猶吉  
爪崎屋倉蔵  
上 山王屋兩家  
坂西村屋広三郎  
益坂屋房吉  
大月喜美比古  
池口屋千代吉  
小野儀八郎  
島板房吉  
松比領御藏仲使  
山手屋一万次郎  
新 大橋富八  
福屋敬次郎

安原吉平  
小谷文三郎  
犬飼利平  
香西(俊)治郎  
松浦広治  
佐藤寿太郎  
白神要三  
柚木喜野  
大西久左衛門  
阿 倉加登履藤(兵衛)  
阿 大崎屋朱次郎  
新 兵六中  
(銘文無)  
大島屋仙蔵  
若松屋庄右衛門  
和泉屋卯八  
大橋虎三郎  
平山万吉  
和泉屋茂太郎

仁科安吉  
船田四五六  
大田次太郎  
全(西)  
三宅喜七郎  
谷清六  
吉田元太郎

玉垣 A~C	玉垣 い~ほ	* 擬宝珠親柱 B~C
親柱 7本	親柱 8本	* 剣先型親柱 い~ほ
小柱 38本	小柱 43本	及びA)

\* 無銘の親柱「は」…後から増設された新しいもの



奉献同  
世 人当 平井松治郎  
阿 倉 須見徳兵衛  
今 氏屋龜太郎  
堺 屋亦平太  
秀 野屋和助  
綿 屋正兵衛  
和 泉屋國次郎  
秀 野屋和助  
北 英一  
阿 別所理七  
川 合佐吉  
原 田常八  
笠 原孫助  
占 見屋徳吉  
伊 子屋竹五郎  
柚 木正兵衛  
中 塚治助  
上 野留平  
野 瀬勝三郎  
上 野紋吉  
平 田九三郎  
近 藤喜八郎  
松 比領御藏仲使  
徳 永藤太郎  
広 常安太郎  
武 纒友七  
花 山吉造  
中 塚仲造  
木 口平吉  
大 本藤真・大森盛行  
高 田善八  
高 田五郎作  
高 田高太郎  
三 次富太郎  
仁 井屋作十郎  
高 田清三郎  
三 次清二郎  
三 次賢一  
香 西鶴松  
香 西長三郎  
青 木俊三郎(讀全)  
小 野兼吉  
平 田熊太郎(讀全)  
浪 刃猪一  
香 西泰太郎  
香 西勘兵衛

〔堀江〕 〔橋居〕



背面参道北側・中ほどの擬室珠親柱の玉垣列……写真の右端玉垣が下の写真左端へ連なる

上の写真・擬室珠親柱の玉垣列はもともとこの位置にあったと考えられる。写真左端親柱に笠石のホバ穴跡が埋めつぶされているのが見える。かつては玉垣がさらに下手へ連なり住吉宮の銘がある石灯笼付近まで延びていたと思われる。下の写真の剣先型親柱の玉垣列は、もと境内の西から北にかけてあったものが、ここへ移されたと考えられる。

玉垣の配置が北側の一方だけというのが珍しい。多分、自動車の乗り入れが便利になると参道を拡張改良舗装したことで、南側の玉垣が取り払われたのであろう。(昭和45年ごろと思う)



背面参道の上から地下道入口付近の剣先型親柱の玉垣列……なんとなくざくしやくした感じ……



写真上・正面参道のけほどにある注連柱

……神前に不浄なものへの侵入を禁ずる印の注連縄を張るために設けられた柱（ワ、ジ参照）

写真下・拝殿西脇にある大きな石灯籠

天保四癸巳（一八三三）正月吉辰 守屋要蔵積信謹建  
 寛政年間（一七九九～一八〇〇）から計画着工した乙島新開  
 は度々の訴訟沙汰で困難を極めた。工事の無事と  
 新田完成を祈願して建立したものと想像している。



同じような石灯籠が拝殿東脇にもあり・安永三  
 甲午（一七七四）九月吉辰 萱谷半重郎親純謹建とある。  
 新町問屋西国屋萱谷氏は宝暦八年（一七五八）京都の  
 仏師に青銅露生地藏菩薩坐像を造らせて円通寺に  
 寄進している。安永元年（一七七〇）江戸の目黒行人  
 坂の大火でこの地藏菩薩が消火作業に大活躍した  
 といひ、当時の人は火消し和尚と呼んだという話  
 が残っている。石灯籠は父の遺業にならって一  
 家の繁栄を願ひ寄進したのかと憶測する。

Ⅱ 総括 Ⅱ

▲ 玉垣建立の推移 ▼

嘉永三年(一八五〇) 羽黒宮社殿の老朽化に伴い再建

本殿再建完成

安政二年(一八五五) 本殿外周玉垣建立(擬宝珠柱玉垣群)

安政四年(一八五七) 幣拝殿再建完成

安政五年(一八五八) 幣帛使昇殿門建立・本殿外周玉垣一部改修

元治元年(一八六四) 正面参道玉垣再建(擬宝珠柱玉垣群)

明治十五年(一八八二) 境内外周(正面参道上の両側)

玉垣建立(剣先柱玉垣群)

明治二十五年(一九〇二) 表参道玉垣建立(剣先柱玉垣群)

補記参考

背面参道玉垣の建立年代は不明であるが、正面参道玉垣再建のころではないかと想像する。

境内外周の西から北にかけての玉垣建立の年代がはっきりしないが、明治四年から同五年にかけてのことであろうと推測する。

- 16 ページ 図上部 親柱 A
  - 20 ページ 図上部 親柱 (ハ)
  - 19 ページ 下段 註記
- } 参照



平成十年五月 七福神石像建立：本殿底下に木彫りの精巧な七福神の存在を知る人は少ない：今では石造祠に収まり庇を借って母屋を取った感じ：

羽黒宮本殿の西側・背面と見える七福神石像(2体は東側にあり)

羽黒宮本殿の千木・堅魚木が載る大屋根  
大屋根の棟の鬼瓦や正面の破風屋根棟に  
は卍の紋様が見える



写真上・神社建築では神殿の妻側(側面)は切妻型が多いが、羽黒宮では入母屋型で  
庇が大きく張り出し大屋根になっている。また、千木・堅魚木にまじって卍紋様など神仏  
混淆がうかがえる。

写真下・大屋根庇裏の二重繁垂木や大屋根を支えるための柱上部等の斗(す)肘木  
(かじき)などの複雑で緻密な組物の構造が見え、職人技のすばらしさと共に再建  
にかけた当時の人々の願いや意気込みが感じられる。

本殿大屋根を支える庇下の組物と頭貫かしら貫  
と呼ばれる横木の上には福神の一部  
恵比寿・弁才天が見える

